

〔研究ノート〕

蕪村画の不可解さ —自然から人生へ—

「つらつら蕪村の画くところを見るに（中略）実自然に材料を求め、写実を以て出発し、而かも常にこれを超脱せり。されば彼の画くところは一に新たなり。しかも必ずしも実自然に固著せざるが故に清新のうち、また、おのづから実自然の境地を離れたるが如きものあり。（中略）蕪村は観者の豊富な想像力を動かし、之れに俟つところ多きがごとし」（沢村専太郎『蕪村論』明治42年）

沢村氏のこの指摘を読んで以来、私はそれまで見て来た蕪村画の裡に新しい世界が開かれるのを経験しました。その経験とは例えば次のようなものです。

下に載せた絵はこの春当館で陳

列した蕪村の飼馬図ですが、一見したところ、柔かな線の積み重ねと爽やかな彩色によって描かれた農家の風景と言えるでしょう。特に飼葉桶を抱えた白髭の農夫とそれを厩から首を伸ばして待つ馬との情景には、見る者の心を和ませるものがあります。蕪村の絵の中には、馬を世話する農夫を主題にしたものが他にも数点あり、そうした情景を蕪村が好んでいたことが知られます。

ただ、この絵を見てみると、私は何か不可解な気分になるのです。その原因が屋根の上にいる馳（ウチ）にあることは見当がつくのですが、だからと言ってどうしてそのような気分になるのか判りません。今で

も私の家の庭を馳（ウチ）が走るがありますから、このような風景の中に馳（ウチ）がいても、そう不思議がることはないかも知れません。一つの面白い点景だと言って、すませてもいいでしょう。

しかし、もしこの絵が沢村氏の指摘されるように私の想像力を待つものであるならば、どういうことになるのでしょうか。

思うに、農夫が馬を世話する光景も馳（ウチ）も、蕪村にとって見馴れたものだったでしょうし、馳（ウチ）が屋根を走るのも格別なことではなかった筈です。ところが、このありふれた光景を蕪村は一定の構図としてしっかりと組合わせたのです。人の良さそうな老農と飼葉をせがむ馬を底辺として、屋根の上を走りぬける馳（ウチ）を頂点とする三角形。飼い馴らされた馬と一匹の野性の馳（ウチ）、人なつこいものと疎まれるもの。しかも、これらのものが単なる対比に終わらず、馳（ウチ）を農夫と馬の上に置くことによって、通常の価値をみごとに逆転させてみせた

のです。このように馳（ウチ）と飼馬を対照して想像を拡げてゆくならば、それまで見えていた明るく長閑な風景が、一転して不透明な意味を帯びた世界に見えて来るのであります。それは丁度、明るく透明な視野に急に蜃気楼が浮かび上がるように、自然のただ中に、一瞬、人生の一断面を垣間見ると言うようなことかも知れません。

以上は私の一つの想像に過ぎませんが、このような眼であらためて蕪村の画を見わたしますと、他にも興味深い絵がいろいろと見出されるのです。沢村氏は同じ『蕪村論』の中で、蕪村の絵には人をして惑わせ考えさせる要素が含まれている、と言った意味のことを書いておられますが、蕪村画の一つの魅力は、正に「実自然に材料を求め、おのづからその境地を離れたるが如きもの」即ち「実人生の真相」を、観る者に想像させるところにあるように思えてなりません。（早川聞多）



蕪村筆飼馬図 絹本着色 123.4×47.7 cm.

